福井大学　宮澤周平　川畑奨太　森田慶助

01　c-Wall

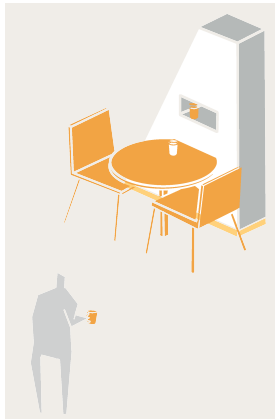
carry　持ち運ぶ　　continue　続く　　cute　可愛らしい　　colorful　色とりどりの

02　壁と時間軸

私たちは壁とともに暮らしている。時計やカレンダーを貼ることで日時を知り、ポスターを貼ることで自己を示し、建具を取り付け服をかけることで生活に利用する。
それにも関わらず、引っ越す時には壁から全てを引き剥がす。私と壁の物語はぷつんと終わる。
「壁に時間軸を与えることができたら」そんな事を考えた。
本提案では、次の住まいにも引き連れていける壁を提案する。壁に時間軸を与えることで人と壁との会話が始まるのではないだろうか。

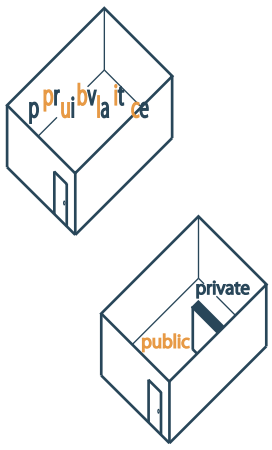
03　壁と会話する

本提案では、住まいを変えても次の住まいに引き連れていくことができる壁「c-Wall」を提案する。
c-Wallは家具の拠り所となったり、生活を区切ったりすることで部屋の中にふるまいの約束事を作り出す。
人はc-Wallと会話するように家具の配置や日常を考えることで、自らの生活空間を主体的に獲得していくだろう。



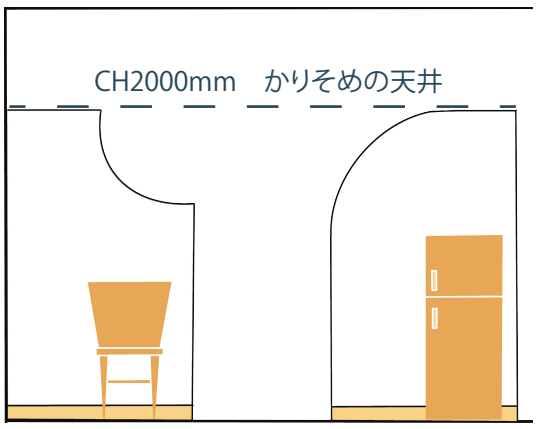
04　c-Wallの規格化

アパートのワンルームは、安価な居住空間の普及により社会に貢献している。だが一歩足を踏み入れると、そこでは生活空間の全てが丸見えとなり、パブリックとプライベートが仕方なく混在している。
c-Wallはそんなワンルーム内に層を作り出し、パブリックとプライベートを分かつ手助けをする。c-Wallを置くことで部屋は多少狭くなってしまうが、それ以上に得られる豊かさや安らぎがあるのではないかという思いから、c-Wallの普及を前提とした寸法の一部規格化を行う。

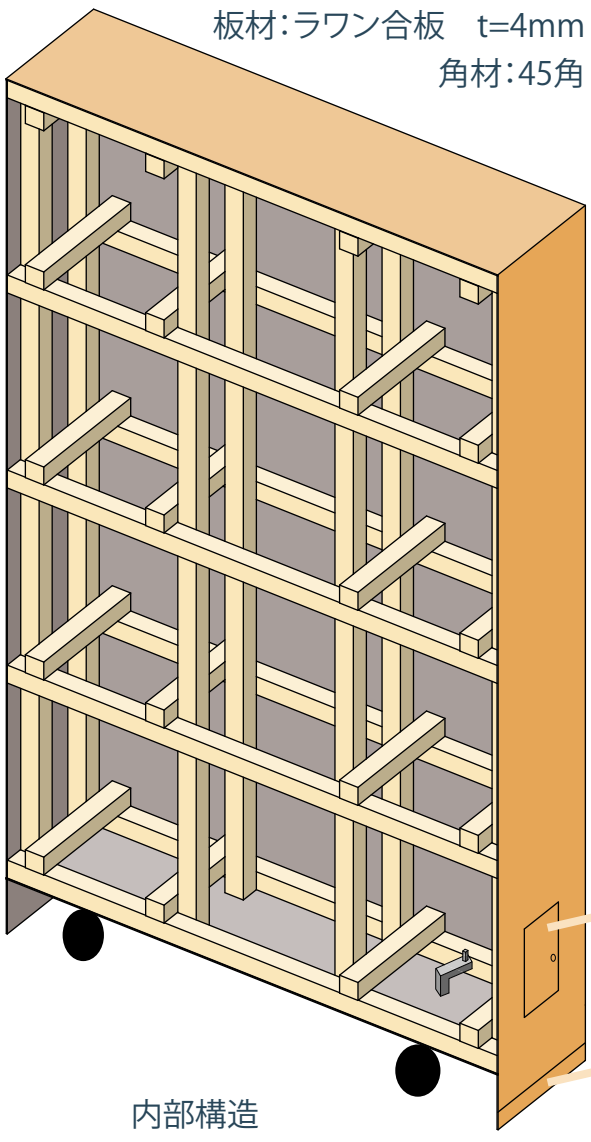


05　ものさしのある生活

壁の高さを2,000mmに統一することで室内にCH2,000mmのかりそめの天井が生まれる。
かりそめの天井は住まいを変えても引き継がれ、生活の中の1つのものさしとなる。
例えば冷蔵庫を買い替えたとき、c-Wallたちの間に立つ新しい冷蔵庫を見て以前の冷蔵庫との大きさの違いに気づく。
c-Wallが記憶の媒介となり、以前の冷蔵庫のことを懐かしむきっかけが生まれる。



06　c-Wallの形



高さ：2,000mm

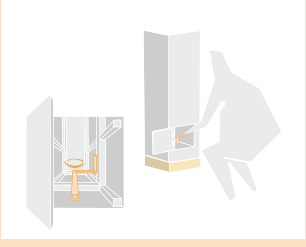
一般的な扉の高さが2,000～2,400mmであるという点、高さを可能な限り大きく取ることでc-Wallをより壁らしく見せたいという点から高さを2,000mmとする。

幅：1,200mm

建築基準法で共同住宅の最小廊下幅が1200mm以上であるという点、幅を可能な限り大きく取ることでc-Wallをより壁らしく見せたいという点から幅を1,200mmとする。

奥行き：300mm

開口にある程度ものが置ける奥行きを取りたいという点、奥行きを取りすぎるとc-Wallが家具のようなボリュームになってしまうという点から奥行きを300mmとする。



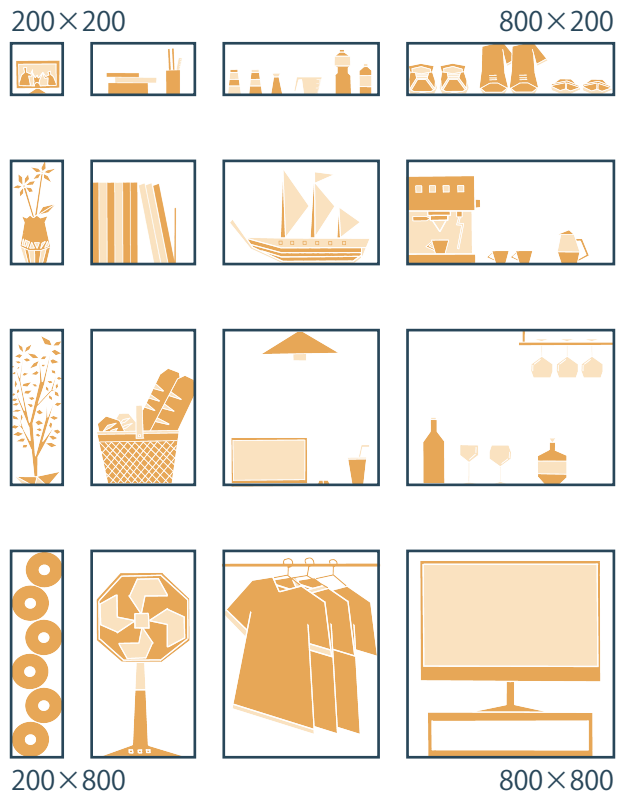
ハンドルを回すことで全体が上昇し、内部のキャスターが接地することで移動可能となる。
c-Wallをどこかへ連れて行く際に段差で傷がつかないよう移動時にキャスターを隠さない構成とする。

c-Wallを長く愛してもらうために巾木を採用し、c-Wallへの負担軽減を目指す。また、巾木があることでc-Wallの壁としての印象を強めることができる。

07　開口について

開口はc-Wallに機能を与える。
開口により生まれた機能は、その時々で変化する。

開口は高さ2,000mmと幅1,200mmの公約数である200mmを基準にした倍数値で規格化し、それを100mmグリッドに合わせて作る。



08　11の形

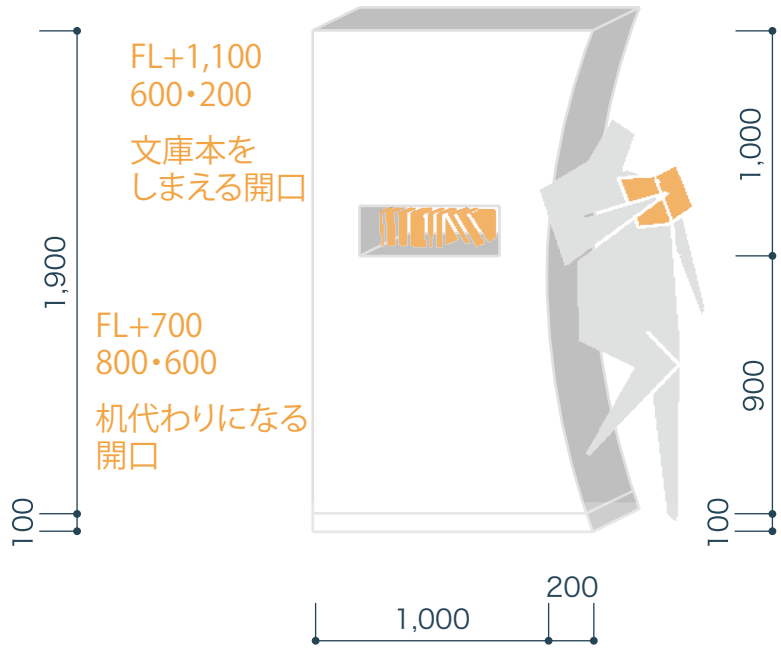
c-Wallに形＝個性を与えることで会話の糸口を生み出す。形の規格化に当たり、「愛着が湧きそうなキャラクターを持つ形」や、「人の行動に作用する形」、「あちら側との関係に作用する形」の計11の形を設計する。

設計ルール

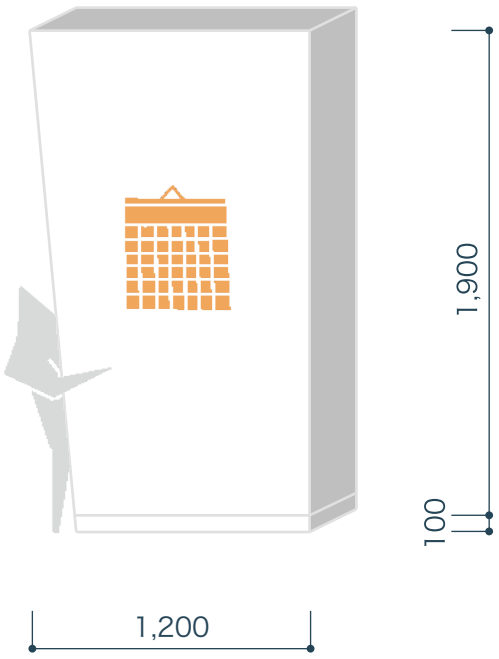
- かりそめの天井を失わないよう必ず水平上面を持つこととする
- 高さと幅の公約数である200mmを基準に寸法を与え、一体感をもたせる
- 4辺の内少なくとも一辺は基本形の寸法のまま扱うこととする

全てのc-Wallの基準となる壁

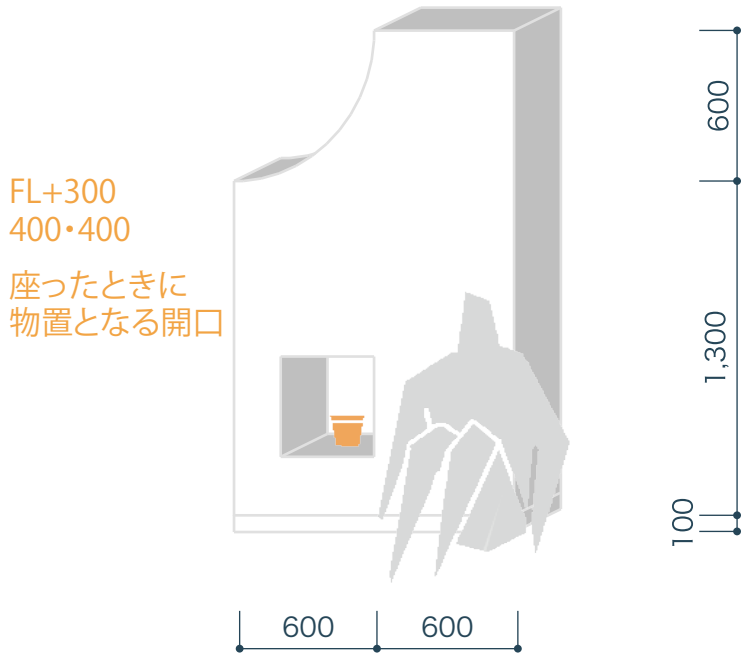
窪みに身体を預けたくなる壁



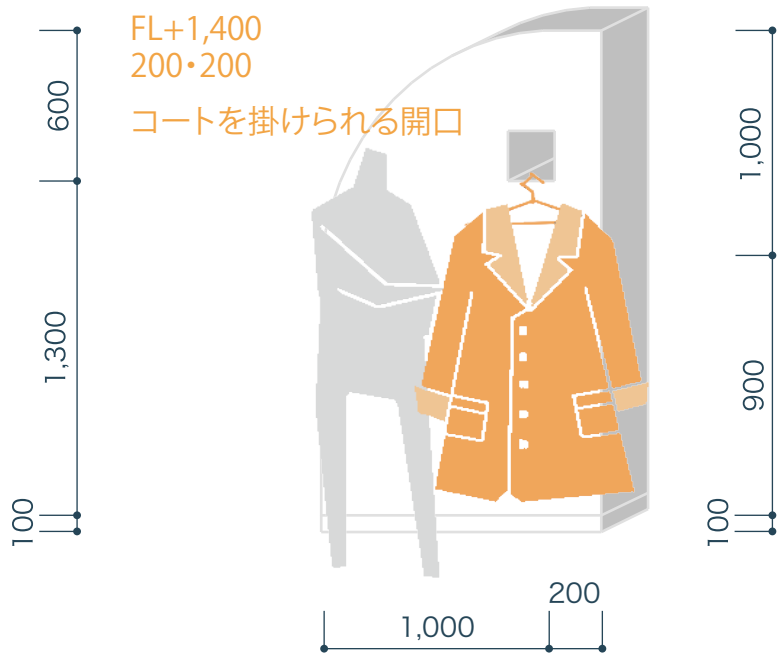
あちら側をなんだか覗き込みたくなる壁



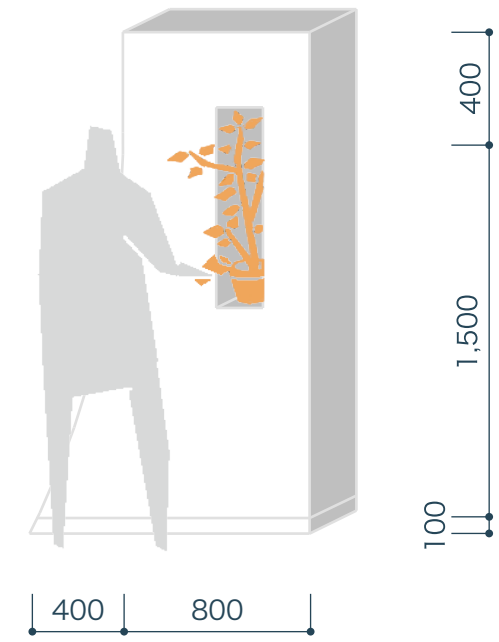
あちら側の上の方を大きくくり抜く壁



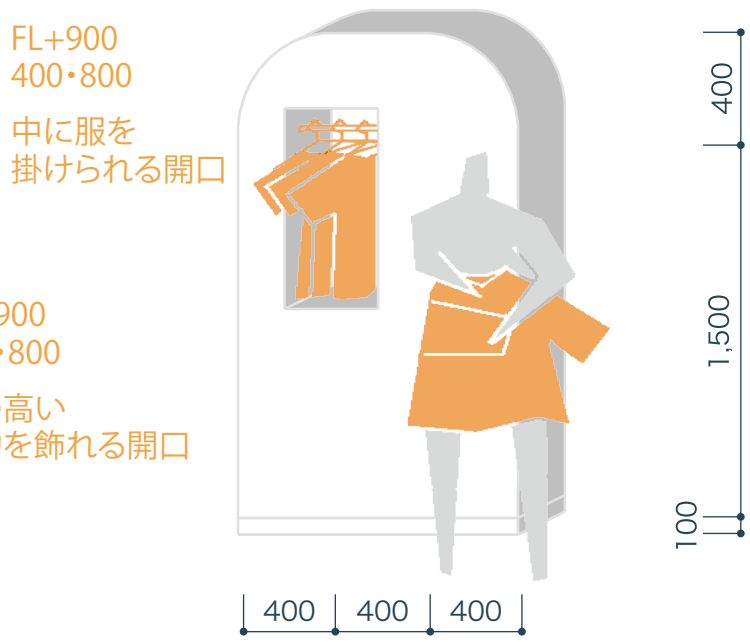
上の方で空間を縁取る壁



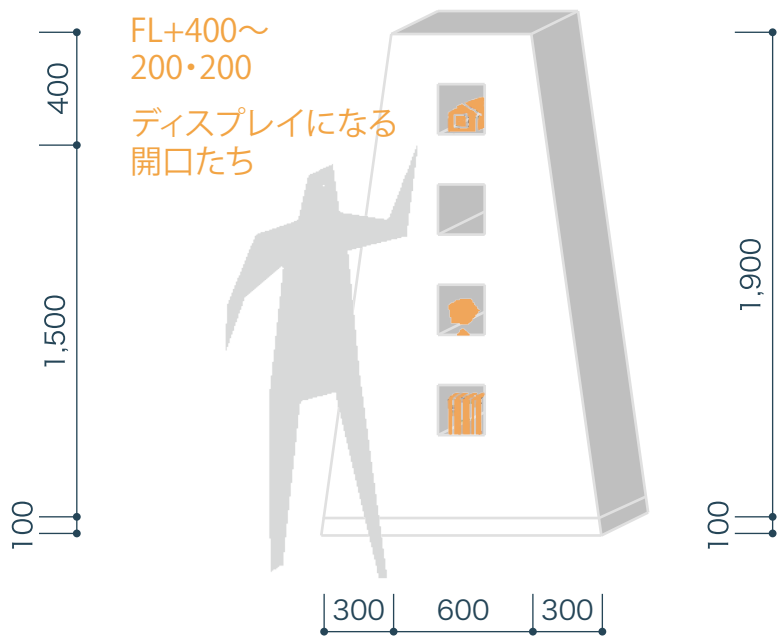
あちら側を歩き去る姿が絵になる壁



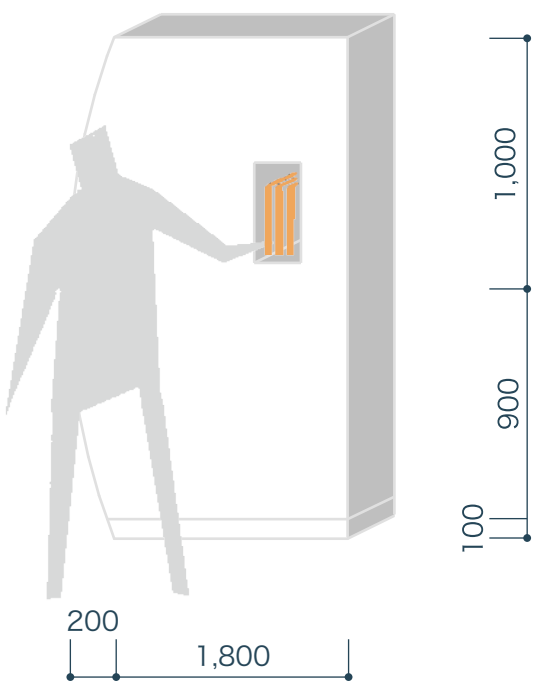
頭が丸くて可愛らしい壁



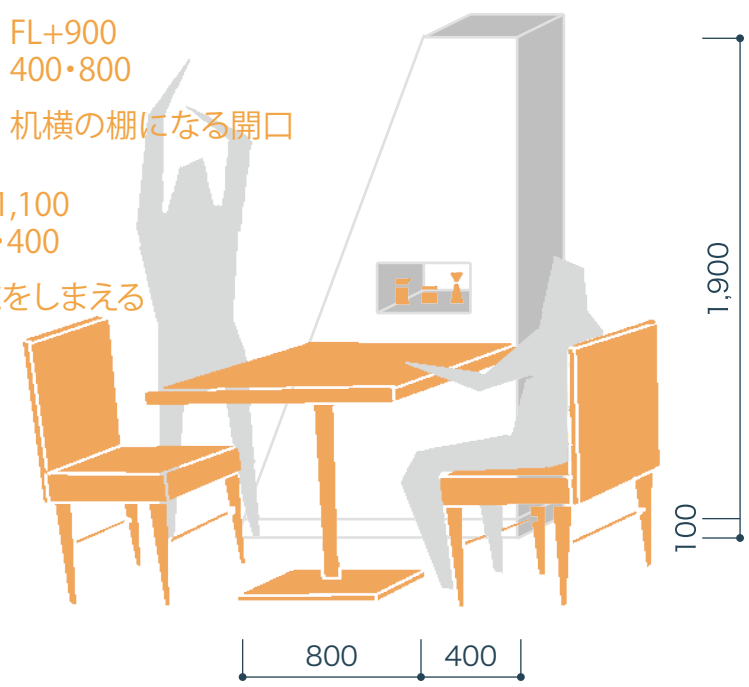
左右対称で頭が尖って少し偉そうな壁



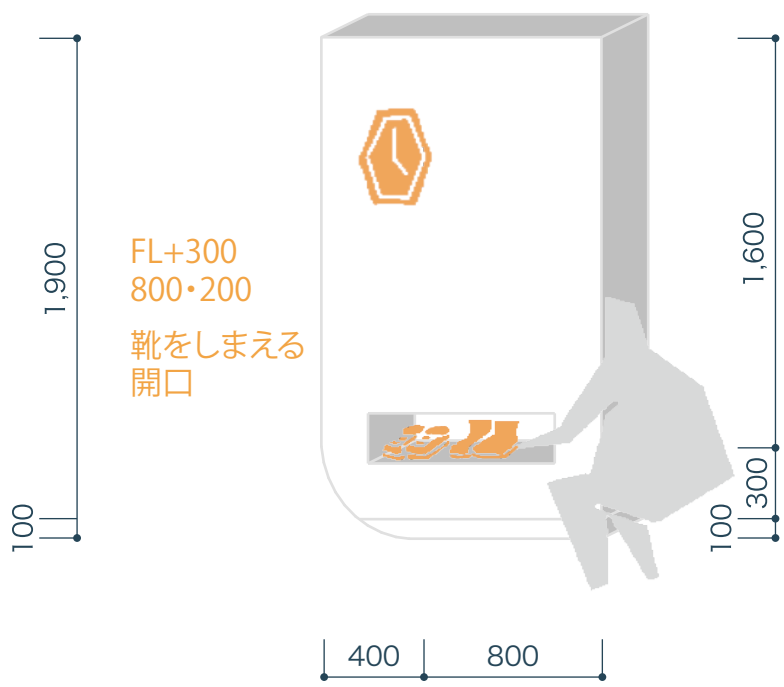
少し出たお腹が空間を優しく縁取る壁



座っていると太くて立ち上がると細い壁

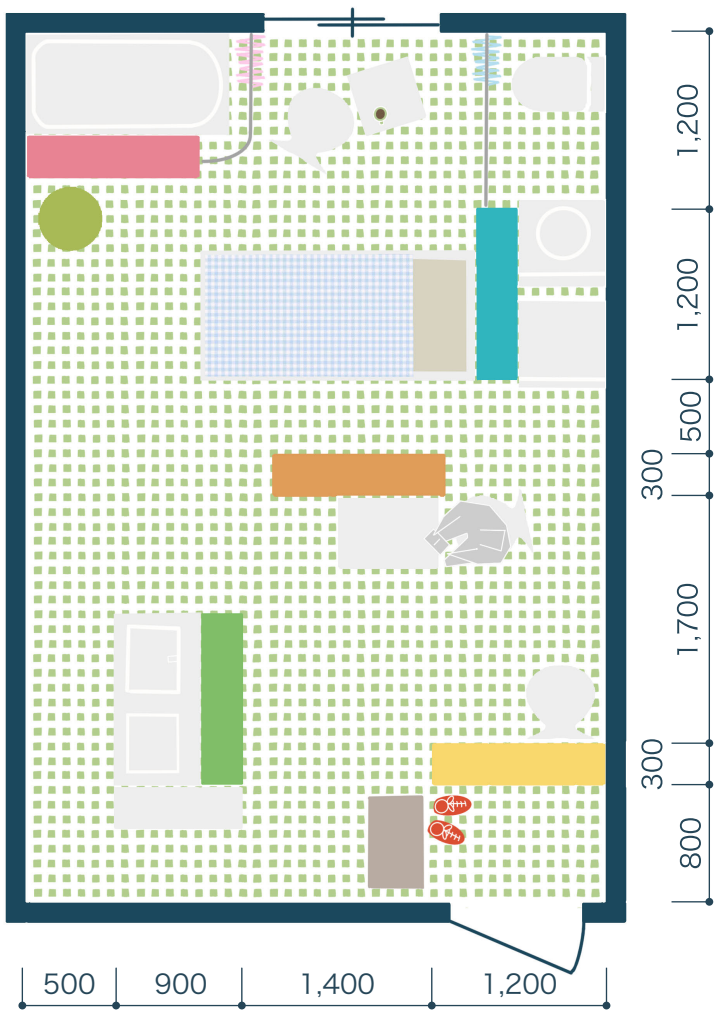


足元が少しだけあちら側と繋がっている壁



09　ワンルーム・ケーススタディ

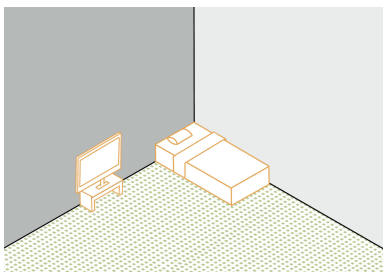
6m×4m×2.4mのワンルームをケーススタディとし、c-Wallを用いた空間づくりを行う



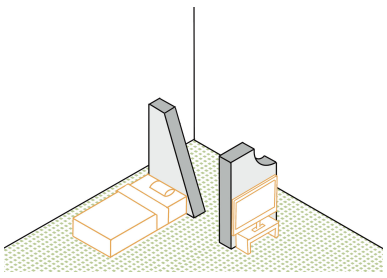
平面図　Scale＝1:50

c-Wallにより生まれる空間特性

c-Wallが家具の拠り所となることで家具が部屋の周縁から開放される。



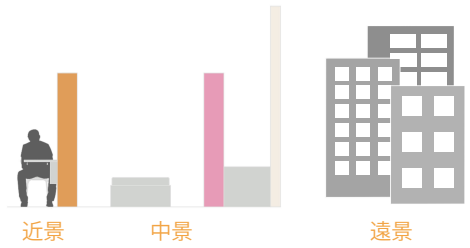
部屋の周縁と
一体化している家具たち



部屋の周縁から
開放される家具たち

部屋の周縁から開放された家具は、それぞれが独立したエレメントとして部屋に立ち現れる。エレメントが多層的に重なり、小さな部屋の中に距離が生まれる。

小さな部屋の中に距離が現れることで、部屋と都市を一体とした近景（＝自分を含むエレメント一体）・中景（＝近景を除く部屋内部）・遠景（＝都市）の関係性が生まれ、部屋から都市までが緩やかに繋がり始める。



c-Wallにより生まれる部屋内の心理的距離は、隣り合った場の別々の行動を許容する。

全体図

色とりどりのc-Wallたちは、それぞれがまとう場を強く意識させる。色とりどりのc-Wallたちの間を飛び回るように生活することは空間が停滞しがちなワンルームの中に動きを生み出す。

周縁からの開放と関わりしろ

ベッドが部屋の周縁から開放されることで独立したエレメントとして立ち現れる。一日の中で何度もベッドを通り過ぎるようになり、ふと腰を掛けたり、乾いた洗濯物を置いたりなどベッドと関わる機会が増える。家具を周縁から開放させることは家具自身の関わりしろを増やすことにつながる。

次の住まいへ

住人がいつかこの家を引っ越すとき、c-Wallをいくつか引き連れて次の家に引っ越すだろう。この住まいでは机の横にあったc-Wallが、次の住まいではキッチンの横にあるかもしれない。また、恋人と同棲を始めたときにはお互いが程よい距離感を保つための境界に、子供が生まれたら一人で寝る練習をするための場作りに。壁に時間軸を与えた結果、生活が変わり続けたとしても変わらないものがそばにある。そんな住まい方が生まれたのではないだろうか。

床の上を自由にc-Wallと家具が動き回りながら場を作れるように、床全体が等価で個別の場を規定しない同一の仕上げとし、水回り、玄関、その他でも用いられ、メンテナンスのしやすいタイル仕上げを採用する。